

論文 | Articles

留学生の漢字力分析

Analysis of Chinese Character (Kanji) Ability of Foreign Students

荒 まゆみ

ARA, Mayumi

尚美学園大学
総合政策学部

Shobi University

2019年6月

Jun.2019

留学生の漢字力分析

荒 まゆみ

Analysis of Chinese Character (Kanji) Ability of Foreign Students

ARA, Mayumi

Abstract

Following the fact that foreign students in the non-kanji area increased in Shobi university, a new subject “Japanese Language Special(Kanji)” was founded in 2017. This subject is a one semester class offered twice a year in the Spring and Fall semesters. Since 2017, four terms have passed. All foreign students in both kanji and non-kanji areas are able to take this class, and their Kanji ability is then measured by the class. There were two main findings. In the non-kanji areas, the level of Vietnamese students was higher compared to students of other countries. And the number of Chinese students studying in the kanji area was not necessarily high. The results of the Placement Test conducted at the time of enrollment of university and the Kanji Proficiency conducted at the beginning of the course, then revealed a correlation between Japanese proficiency for the foreign students and Kanji ability. In addition, the results of the Placement Test and Term-end Test suggest that the Kanji ability is improving throughout the class.

要 約

本学では非漢字圏の留学生が増えてきたのを受け、2017年度より「日本語特殊（漢字）」科目が新設された。半期ごとの通年授業として2018年の後期で4期を終えた。この授業は漢字圏、非漢字圏を問わず、すべての留学生が履修可能となっており、留学生の漢字力を測ることが可能になった。そして、非漢字圏でもベトナムとその他の国との留学生のレベル差、漢字圏中国人留学生の点数が必ずしも高いわけではないという、2つのことが明らかになった。また、入学時に行っている日本語プレイスメントテストと授業の最初に行う漢字実力テストの結果から留学生の日本語力と漢字力との相関関係がわかった。さらに、日本語プレイスメントテストと期末テストの相関を調べると、授業を通して全体的に漢字力が底上げされている可能性が示唆される結果となった。

キーワード
 入学時の日本語プレースメントテスト
 (The Placement Test of Foreign Students at the Time of Enrollment)
 漢字実力テスト (Kanji Proficiency Test conducted at the beginning of the course)
 期末テスト (Term-end Test)

1. はじめに

近年、来日して日本語学校で日本語を学ぶ就学生が増加している。それらの就学生はさらに専門学校や大学、大学院への入学を希望しており、本学でも留学生が増えている（表1）。その中には非漢字圏の留学生も多く、本学では2017年度より漢字教育のみを特化させた「日本語特殊（漢字）」科目（以下、漢字クラス）を設けた。本学の留学生向け日本語教育には、2年間の「日本語」の他、「日本語能力試験対策講座」「日本事情」の科目がある。「日本語」クラスには四技能向上のための各クラス共通のシラバスがある。漢字の勉強も行うが、さらに、漢字教育の充実を図るという目的で、漢字クラスが設けられた。このクラスの設置は主に非漢字圏の留学生に対応しようとするものではあるが、漢字圏の留学生も含め、すべての留学生が履修可能となっている。漢字圏の留学生は漢字を見て意味を理解することはたやすいが、日本語としての漢字そのものの読み書きができるわけではない。特に、漢字の読みに関しては漢字圏、非漢字圏とも大差ない。また、韓国は表1で漢字圏に入れているが、韓国は漢字の使用が減っており、漢字が苦手な留学生が多い。漢字クラスの設置により、留学生の漢字レベルがどのくらいあるのか、具体的な検証が可能になった。

表1 各年度の漢字圏、非漢字圏の留学生数、及び、非漢字圏留学生の国籍

	漢字圏の留学生数	非漢字圏の留学生数	非漢字圏留学生の国籍
2012年度	134名	7名	ベトナム (4)・ネパール (3)
2013年度	112名	11名	ベトナム (4)・ネパール (1)・モンゴル (1)・スリランカ (1)・ミャンマー (1)・ドイツ (1)・メキシコ (2)
2014年度	88名	12名	ベトナム (9)・ネパール (2)・モンゴル (1)
2015年度	61名	14名	ベトナム (11)・フィリピン (1)・オーストラリア (1)・カナダ (1)
2016年度	66名	27名	ベトナム (17)・ネパール (3)・モンゴル (1)・インドネシア (1)・ウズベキスタン (4)・フィンランド (1)
2017年度	54名	40名	ベトナム (38)・ネパール (2)
2018年度	101名	31名	ベトナム (17)・ネパール (8)・モンゴル (1)・スリランカ (1)・ミャンマー (3)・アメリカ (1)

※3年次編入生は除く

2. 先行研究

非漢字圏の日本語学習者にとって漢字の習得は易しいものではない。漢字の習得にどのような指導が有効か、多くの研究が行われている。Vorobeva Galina (2014) は非漢字圏学習者の文字認知特性に適合した漢字教材の開発を行い、「漢字字体を考慮に入れないで作成された漢字教材が多く、複雑な漢字が簡単な漢字より早く出ること、また合体文字がその構成要素である単体文字より早く出ことは漢字教材の問題点になっていると見られる」(P.5) と述べている。また、川森 (2000) は漢字の筆順指導についての考察を行い、ある非漢字圏の学習者が自分の漢字力向上には筆順の理解が必要だと考え、教師にその指導を求めてきた旨の報告をしている。ただ、実際に筆順原則についての理解が漢字力向上に効果があったかどうかは今後の課題とされている。研究は非漢字圏の学習者に対してだけでなく、漢字圏の学習者に対する漢字指導についても行われている。濱田・高島 (2009) は中国人学習者の中で漢字学習の必要性を認識する学習者が増えたことを挙げ、彼らは大学生活や日常生活において特に漢字を読む機会が多いこと、日本語の漢字の「読み」「字形」「意味」における中国語の漢字との違いを認識し、それを難しいと考えていることを調査結果として報告している。中国人学習者は一般に漢字の書きよりも読みのほうが苦手とされる。しかし、書き問題においても読み問題同様に一定数の誤答が見られたことを述べている。魏・加納 (2012) のアンケート調査でも、漢字圏・非漢字圏を問わず、漢字の読み方、書き方、意味、覚え方などの中で、読み方の問題が圧倒的に大きいことが報告されている。加納 (2018) は「漢字語彙を音声で聞いた場合の処理に注目し、漢字語彙を読解力、作文力のみならず聴解力の増強にも役立てられるような漢字語彙教育を考えて行く必要があるのではないだろうか」(P.18) と述べている。小林 (2004) は「メタ認知」が漢字圏学習者に果たす役割について述べている。「漢字圏日本語学習者と非漢字圏日本語学習者では、「自分は漢字を母語として知っている」という知識の有無があるため、「人変数に関する知識」が大きく異なると考えられる。すなわち、漢字圏日本語学習者は「自分は漢字を知っている」というメタ認知的知識を持っており、この「人変数に関するメタ認知的知識」が他のメタ認知的知識やメタ認知的活動に影響を及ぼす」(P.93) と述べている。國澤・梶原は2016年度から中級レベルの漢字・語彙クラスが別科に新設されたことを受け、自律学習の実践を報告している。本学も2017年度より漢字に特化した漢字クラスが新設された。中級レベルからの漢字・語彙教育の難しさは共通した課題である。本学の対象留学生は学部生であり、すでにある程度の漢字は日本語学校で学んできている。しかし、初級レベルの、しかも身近な語彙の漢字でさえ書けない留学生がいるのも事実である。前述の加納 (2018) は「自律的学習の意識が高い学習者が集まったクラスでは順調に上級漢字語彙の習得が進むが、教師任せの学習態度の学習者が多いと、テキストの学習項目を追うだけの授業になってしまう場合もある。上級に至るまで自律的学習者を育てることが、初級、中級を通して大きな課題となっている。」(P.17) と述べている。本学でも自律学習が進んでいる留学生ほど漢字力が高くなっている。

3. 授業内容

漢字クラスでは1回か2回目の授業で漢字の試験（以下、漢字実力テスト）を行っている。留学生の漢字力を把握するのが目的である。漢字実力テストではまさに各留学生の蓄積された漢字力がわかる。そして、その結果は漢字圏、非漢字圏の違いというだけでなく、個人差も大きくなっている。授業は大きく前半と後半に分け、前半は基礎的な確認、後半は新聞記事などの生教材を用いて、特に漢字の読みに重点をおいて進めている。まず、前半は中級レベルの漢字教科書を用い、筆順、訓読み、音読みの確認、その漢字を用いた語彙の導入を行っている。また、漢字の覚え方の工夫として、偏と旁など部首を理解させ、どのようなパーツで漢字が成り立っているのかを再確認させる。すでに日本語学校で習得してきたことであるが、これは自主学習の移行への手助けになるので、再度行っている。教科書は『1日15分の漢字練習中級下』アルクを使用している。この教科書には一課に5つの漢字が出てくる。まず、5つの漢字を使った短文が出てるので、その短文を筆者が読み上げ、学生にノートに書き取らせる。その中の漢字を次の授業までに書き順、読み（訓・音）、その漢字を用いた語彙を調べて来させる。二課分10の漢字を課題としている。それを、次の週に一字ずつ確認をしていく。学生にホワイトボードに書かせ、まず、書き順を皆で確認していく。厳密な書き順までは求めないが、規則的な書き方ができなければ、字形が崩れる。たとえば、「火」を「ㇿ」から書き始める中国の留学生、また、漢字を上から左から書くという規則を全く無視して書く非漢字圏の留学生もいる。規則通りに書かなければ、覚えるのにも支障が出る。授業の後半は新聞記事を取り上げ、最終的に音読ができるようにしている。記事の漢字を十分に練習、確認テストを行った後、一人ずつ個別に読ませている。各人のレベルに合わせ、数週間の猶予を与え、読めるようになった学生から順次読ませている。学期の後半では、『ニュースの日本語聴解50』スリーエーネットワークのテキストを用い、あるまとまったニュースの記事をディクテーションさせている。そして、できるだけ漢字に書き直して提出させる。この段階でかなり文章の意味を捉え、一定の時間内での確かな漢字を用いて書ける学生と、ひらがなもままならない学生とに大きく分かれる。また、意味を取り違え、異なる漢字にする者もいる。同音異義語の多い日本語ならではの問題である。漢字と語彙との同時導入は欠かせない。常用漢字2136字種（旧日本語能力試験1級出題漢字数もほぼ同数）という習得の目安はあるが、社会科学系の文章に頻度の多い漢字を優先させている。ただ、本学には芸術情報学部もあり、総合政策学部とは必要とされる漢字や語彙が異なる。できる限り、意識して映像や音楽に関係のある生教材を使用するようにはしているが、大学生として知っておいてもらいたい時事問題が中心となる。テストは頻繁に行い、あるレベルに達しない場合は再テストを繰り返す。また、中間、期末テストの前には出題範囲を事前にプリントにして渡している。

4. 研究目的

日本において漢字圏、非漢字圏でクラス分けを行っている日本語学校は多くない。初級で習う漢字は旧日本語能力試験3級レベルで300字程度となっている。非漢字圏の就学生にとってもこ

のレベルまでは特に問題はない。しかし、中級に入ると、一気に漢字数が増え、教科書も読み物が多くなり、漢字の勉強を断念してしまう学習者も多くなる。2級レベルで1000字程度、1級レベルで2000字程度の漢字を最長2年で習得し、入学試験を受けて専門学校や大学に進学する。本学の留学生の受験条件は2級レベルなので、1000字の漢字は習得できていることになる。しかし、はたして実際にはどの程度の漢字を習得しているのかはわからなかった。2017年度より漢字に特化したクラスが設けられ、ある程度留学生の漢字力を把握することができるようになった。留学生の漢字力の実態の把握と漢字習得のためのよりよい指導方法を探ろうとするのが本研究の目的である。

5. 研究方法、及び結果

漢字実力テストの結果を分析して留学生の漢字力の実態を調べる。さらに、入学時に行う日本語プレースメントテストと期末テストとの相関関係を調べ、総合的な日本語力と漢字力との関係と授業の効果を検証する。

5.1 履修状況

各年度の履修人数を表2に示す。履修登録はしているが、一度も出席をしていない者、初回のみ出席者は除く。この中には最終的に失格になった者、聴講生も含まれる。

表2 各年度の出身国別履修人数
※登録だけ、初回のみ出席者は除く

	2017年度 前期	2017年度 後期	2018年度 前期	2018年度 後期
合計	22	13	21	18
中国	5	8	15	8
ベトナム	8	5	4	4
韓国	6		1	3
マレーシア	2			1
ネパール	1			
ミャンマー			1	
ウズベキスタン				1
外モンゴル				1

2017年度前期の履修者は22名で、ベトナムが8名と一番多く、次いで、韓国6名、中国5名、マレーシア2名、ネパール1名となっている。後期は13名で、中国8名、ベトナム5名である。2018年前期の履修者は21名である。中国15名（うち1名は聴講）、ベトナム4名、韓国とミャンマーがそれぞれ1名ずつである。後期は18名で、中国8名、ベトナム4名、韓国3名、マレーシア、ウズベキスタン、外モンゴルがそれぞれ1名ずつとなっている。

5.2 漢字実力テスト

漢字実力テストは漢字の読み問題25問（50点）、書き問題25問（50点）からなる。出題漢字は新聞の記事から抜粋したものである。出題漢字を新日本語能力試験（以下JLPT）レベル別（nihonngo-pro.com）にしたものが表3である。出題漢字は延べ94文字である（5文字重複しており、総数は99文字）。読み問題ではL5レベルの漢字を1つ、L4、9つ、L3、22、L2、6つ、L1、13の漢字を出題している。書き問題ではL5レベルが7つ、L4が8つ、L3が17、L2が7つ、L1が4つの漢字となっている。本学の受験条件がL2レベル（旧日本語能力試験2級レベル）であるので、同等レベルか若干易しくなっている。次に語彙レベルで見してみる（旧日本語能力試験の出題基準）。語彙レベルでは対象語が56ある。表4に示す。読み問題では「否定」「裁判」などの2級レベルが16で一番多い。1級レベルは7つ、その他基準にはない「～相」（大臣の意味）「釈明」などが7つとなっている。書き問題では4級レベルの「電話」「銀行」などが5つ、「生産」「増える」などの3級レベルが5つ、「内容」「集中」など2級レベルが10、1級レベルが4つ、基準にはないものが「撤退」「中小」の2つとなっている。語彙レベルでも2級レベルの語彙を一番多くしている。

表3 出題漢字 JLPTレベル別

	読み問題	書き問題
L5	半	電・小・中・大・話・生・行
L4	否・判・明・野・自・答・用・問・事	集・方・悪・業・銀・婚・旅・待
L3	定・相・認・記・違・指・許・辞・任・要・求・政・信・性・件・交・難・予・想・過・数・示	内・容・産・退・化・増・続・雑・深・刻・経・済・熱・定・迎・対・招
L2	防・党・府・欧・州・航	針・築・採・算・混・協・象
L1	衛・裁・憶・釈・隊・揮・弁・態・離・脱・条・整・渉	撤・拡・企・結

表4 出題語彙 旧日本語能力試験レベル別

	読み問題	書き問題
4級		電話、熱い、銀行、結婚、旅行
3級		生産、増える、続ける、経済、招待
2級	否定、裁判、認める、記憶、違い、自衛、許す、要求、政府、信用、～性、問う、事態、条件、過半数、指示	内容、集中、方針、混雑、深刻、拡大、企業、結ぶ、迎え、対象
1級	防衛、野党、隊、指揮、整う、交渉、予想	築く、採算、悪化、協定
出題基準 になし	相、釈明、辞任、答弁、欧州、離脱、難航	撤退、中小

5.3 漢字実力テスト結果

表5に漢字実力テストの結果を示す。表2で示した履修者の数と合わない部分があるが、これはテストを行った後の回から出席した学生がいるためである。まず、受験者全体の平均点を見る

と、2017年前期が36.3点、2018年前期が44.7点、同年後期が33.5点となっている。次に、国別で見ると、2017年前期の履修者はベトナムが一番多く、ベトナムの留学生の最高点82点、最低点6点となっている。平均で見ると、34.2点となり、一番高い。次に、中国（1名）と韓国（1名）がそれぞれ34点となっている。2018年の前期の履修者は中国が一番多く、その平均点は51.2点が一番高い。次いで、ベトナム（4名）の平均点38.5点、ミャンマー（1名）16点、韓国（1名）0点となっている。同年後期はマレーシア（1名）の得点が一番高く52点、次いで、中国（7名）平均点35.7点、ベトナム（4名）32.5点、ウズベキスタン（1名）4点となっている。2017年秋学期はテストを学生に返却してしまい、データが取れていない。この結果を見ると、中国とベトナムの差がほとんどなく、ベトナム以外の非漢字圏の得点が低いことがわかる。また、韓国も得点が低くなっている。では、漢字クラスを履修した留学生の日本語レベルは全体で見るとどうなのか。表6に2017～2018年度全留学生の入学時日本語プレースメントテストの結果、表7に2017～2018年度漢字クラス履修者の入学時日本語プレースメントテストの結果を示す。全留学生の入学時日本語プレースメントテストの平均点は2017年度50.32点、2018年度54.59点、標準偏差は2017年度19.04、2018年度18.12となっている。漢字クラスを履修した留学生の入学時日本語プレースメントテストの平均点は2017年52.42点、2018年56.36点となっており、留学生全体の平均点よりやや高くなっている。

表5 各学期の漢字実力テストの得点（出身国別）と全体の平均点

	2017年度		2018年度		
	前期	後学期	前期	後期	
全体の平均点	36.3点		44.7点	33.5点	
中国	34	データなし	76, 72, 70, 70, 66, 60, 52, 50, 50, 46, 40, 38, 28, 28, 22 (平均点51.2)	52, 44, 42, 40, 30, 26, 16 (平均点35.7)	
ベトナム	82, 60, 32, 30, 12, 6 (平均点34.2)		70, 40, 26, 18 (平均点38.5)	50, 44, 26, 10 (平均点32.5)	
韓国	34		0		
マレーシア				52	
ミャンマー				16	
ネパール					
ウズベキスタン					4

表6 2017～2018年度 全留学生の入学時日本語プレースメントテストの結果

	2017年度	2018年度
受験者数	87名	129名
平均点	50.32	54.59
標準偏差	19.04	18.12

表7 2017～2018年度 漢字クラス履修者の入学時日本語プレースメントテストの結果

	2017年度	2018年度
受験者数	21名	36名
平均点	52.42点	56.36
標準偏差	14.47	12.81

次に、漢字クラス履修者の漢字実力テストと入学時日本語プレースメントテストとの関係を見てみる。入学時日本語プレースメントテストの平均点は2017年度が52.42点、2018年度が56.36点（表7）、漢字実力テストは表5で示した通り、2017年度が36.3点（前期のみ）、2018年度の前期が44.7点、後期が33.5点で、平均39.1点となっている。相関係数は0.46で、統計学的には正の相関関係が見られる結果となった。図1に散布図を示す。つまり、漢字クラス履修者と全留学生の日本語のレベルとの間に大きな差は見られない。また、漢字実力テストとの相関関係も見られるということで、入学時日本語プレースメントテストの得点が高い留学生ほど漢字力もあるということがわかる。

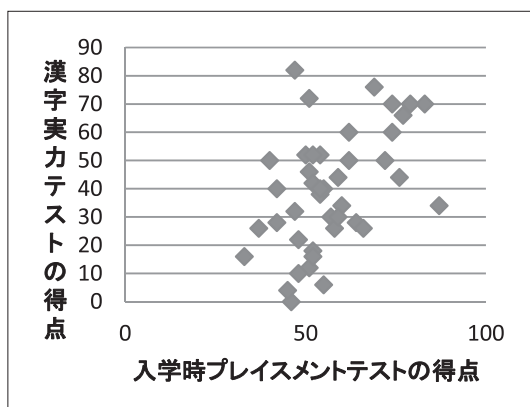


図1 漢字クラス履修者の入学時日本語プレースメントテストの得点と漢字実力テストの得点の散布図（42名対象）

5.3.1 学年別の違い

次に学年で得点に違いがあるのか調べてみた。表8に学年別履修者の人数を示す。履修者は2018年度後期以外、1年の履修者が一番多くなっている。表9の上位5名までの結果を見ると、2017年度春学期の得点上位2名は2年で、2018年度前期は1～2位が3年、3位2年、4～5位が1年、2018年度後期は1位に1年（2年と同位）が入っているものの、あとは全員2年が5位までを占めている。学年が上がれば若干漢字力も高くなっている。

表8 学年別履修者数

	2017年度前期 (履修者数22名)	2017年度後期 (履修者数13名)	2018年度前期 (履修者数21名)	2018年度後期 (履修者数18名)
1年	8名	11名	16名	6名
2年	7名	1名	1名	10名
3年	1名	0	4名	2名
4年	6名	1名	0	0

表9 漢字実力テスト上位5名までの学年

	2017年前期	2017年後期	2018年前期	2018年後期
上位1	2年 (86点)	データなし	3年 (78点)	2年 (52点)
2	2年 (58点)		3年 (74点)	1年 (52点)
3	1年 (34点)		2年 (72点)	2年 (50点)
4	2年 (32点)		1年 (70点)	2年 (44点)
5	1年 (12点)		1年 (70点)	2年 (42点)

5.3.2 漢字実力テストの読み、書き問題の正解率（語彙レベル）

次に、どの漢字（語彙レベル）ができていないのか、具体的に見てみる。履修者の多い中国とベトナムの留学生の結果（3学期分）を取り上げる。表10に読み問題がどの程度できているかそれぞれの語彙ごとに示す。一つの語彙として漢字がすべて読めたものを正解としている。

表10 漢字実力テストの読み問題正解率—中国とベトナムの留学生対象—（語彙レベル）

	中国 23名	ベトナム 14名		中国 23名	ベトナム 14名
否定	65%	50%	信用性	78%	92%
防衛相	0%	14%	問う	30%	64%
裁判	69%	57%	事態	73%	50%
認める	60%	64%	欧州	30%	21%
記憶違い	39%	64%	離脱	4%	14%
釈明	13%	35%	条件	56%	57%
野党	60%	21%	整う	8%	28%
自衛隊	13%	14%	交渉	13%	42%
指揮	47%	21%	難航	43%	21%
許す	73%	64%	予想	73%	78%
辞任	69%	57%	過半数	34%	50%
要求	65%	78%	指示	52%	50%
政府答弁	17%	35%			

全体で見ると、「信用性」「予想」の漢字は70%以上の留学生が、「認める」「許す」「要求」は60%の留学生が読めている。一方、「防衛相」「自衛隊」「離脱」「整う」は正解率が低い。国別で見ると、倍の違いが見られる漢字がある。「野党」「指揮」「難航」は中国の留学生が、「問う」「政府答弁」「交渉」はベトナムの留学生のほうが読めている。対象が1名だけなので、表10には載せていないが、ミャンマーの留学生で読めた漢字は「認める」「許す」「信用性」「予想」で、ウズベキスタンの留学生は「許す」「予想」だけであった。

表11 漢字実力テストの書き問題正解率—中国とベトナムの留学生対象—（語彙レベル）

	中国 23名	ベトナム 14名		中国 23名	ベトナム 14名
でんわ（電話）	95%	78%	かくだい（拡大）	21%	7%
ないよう（内容）	100%	50%	けいざい（経済）	65%	64%
しゅうちゅう（集中）	60%	64%	あつい（熱い）	52%	7%
せいさん（生産）	69%	14%	ちゅうしょうきぎょう（中小企業）	43%	21%
てったい（撤退）	26%	0%	ぎんこう（銀行）	86%	78%
ほうしん（方針）	39%	14%	きょうてい（協定）	13%	7%
きずく（築く）	0%	7%	むすぶ（結ぶ）	13%	28%
さいさん（採算）	8%	0%	けっこん	82%	42%
あつか（悪化）	26%	21%	むかえる（迎える）	52%	21%
ふえ（増え）	56%	42%	りょこう（旅行）	91%	21%
つづける（続ける）	52%	64%	たいしょう（対象）	13%	21%
こんごつ（混雑）	60%	14%	しょうたい（招待）	43%	7%
しんこく（深刻）	30%	0%			

読み問題と違い、書き問題は漢字圏の中国の学生のほうが得点が高い（表11）。全体としては、「でんわ」「ないよう」「しゅうちゅう」「つづける」「けいざい」「ぎんこう」が書けていた。漢字圏の中国の留学生は語彙としての意味が捉えられず、音の似ている漢字を書くケースが見られた。「さいさん（採算）」を「財産」、「しんこく（深刻）」を「新国」「進国」、「せいさん（生産）」を「清算」「計算」と書いた留学生がいた。また、中国の留学生は中国の漢字をかくケースも見られた。一方、ベトナムの留学生の半数以上が書けた漢字は「しゅうちゅう（集中）」「つづける（続ける）」「けいざい（経済）」「ぎんこう（銀行）」「むすぶ（結ぶ）」「たいしょう（対象）」で、書き問題では圧倒的に中国の留学生のほうが書けている。

5.3.3 漢字実力テストの読み、書き問題の正解率（漢字レベル）

次に、漢字一字ずつのJLPTのレベルで正解率をしてみる。図2に読みと書き問題のそれぞれの漢字のレベル別正解率を示した。読み問題ではL3～L5レベルの正解率は変わらない。L5の漢字は「半」だけである。この「半」を3割の履修者が正確に読めなかった。「はん」「は」と間違っただけではなく、空欄にしているケースがいくつかあった。「はん」だけは読んでも「過半数」が読めず、「はん」も書かなかったと考えられる。L2では45.23%、L1は36.73%と低くなっている。一方、書き問題ではそれぞれのレベルで大きく異なる。L5は「小」「中」「大」などであり、画数が多いのは「電」「話」であるが、「電話」も書けない留学生がいた。L2の正解率が低いのは「採算」「協定」など語彙の意味がわからなかったことによるものが大きいと思われる。

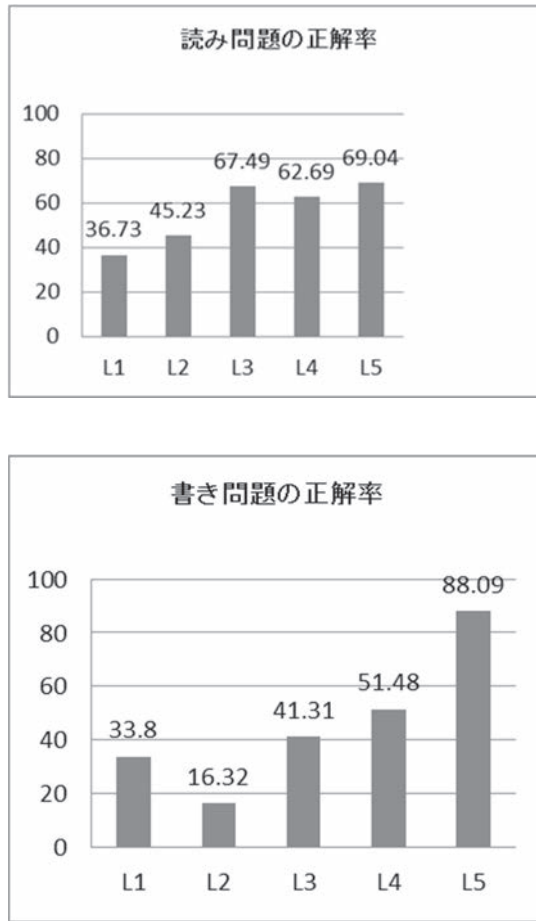


図2 JLPT各レベルの正解率—漢字の読みと書き—

5.4 期末テスト結果

次に、学期最後の期末テストの結果を表12に挙げる。平均点を見ると、2017年前期69.2点、秋学期79.5点、2018年前期77.3点、後期67.3点となっている。期末テストの2週間ほど前に出題範囲の漢字（70問程度の語彙）をプリントにして渡している。漢字圏、非漢字圏混合クラスであり、漢字を苦手としている留学生にも限られた漢字をまず正確に覚えてほしいという意図からである。そのためか、平均点は比較的高くなっている。この期末テストと入学時日本語プレースメントテストとの相関係数を見ると、0.27になっている。漢字実力テストと期末テストとの相関係数は0.46である。これらの数字を見ると、授業を通して全体的に漢字力が底上げされているという可能性が示唆されることが言える。

表12 各学期の期末試験の得点（出身国別）と全体の平均点

	2017年度		2018年度	
	前期	後期	前期	後期
全体の平均点	69.2点	79.5点	77.3点	67.3点
中国	88, 75, 72, 58, 58	99, 86, 82, 82, 82, 80, 78, 68,	100, 96, 96, 96, 96, 88, 84, 80, 76, 68, 64, 64, 48	96, 90, 78, 76, 62, 12
ベトナム	80, 74, 71, 68, 53, 53, 50	80, 80, 76, 62	92, 76, 56, 32	96, 94, 78, 76
韓国	100, 87, 82, 76, 61,			52, 20
マレーシア	79, 56			92
ミャンマー			80	
ネパール	43			
ウズベキスタン				62
外モンゴル				26

6. 考察とまとめ

非漢字圏の留学生は漢字が弱いという認識はあったものの、はたしてどの程度の漢字が読め、書けるのか具体的に調べたことはなかった。また、漢字圏の留学生は漢字がわかるということで、週2コマの日本語の授業だけでの対応でよいとされてきた。しかし、漢字の勉強は特別には必要ではないものの、正確な読み書きができるわけではないという教師間での認識はあった。今回、漢字に特化した漢字クラスで、漢字圏、非漢字圏の留学生の漢字能力を測ることができた。漢字クラスで初回に行う漢字実力テストを使用し、さまざまな角度から留学生の漢字力を見てきた。その結果、漢字力は漢字圏、非漢字圏を問わず、個人差が大きいこと、また、総じて中国、ベトナムは得点が高く、それ以外の非漢字圏の留学生の得点が低いことがわかった。ベトナムはかつて漢字を使用していた。現在では漢字そのものは使われてはいないが、ベトナムにはベトナムにおける漢字語彙である漢越語があり、漢字の音と似ている。したがって、ベトナムの留学生にとって音読みは訓読みほど難しくないとと言える。韓国は漢字圏ではあるものの、国で漢字を使用する機会が少なくなり、全体的に非漢字圏の留学生と同レベルになっている。漢字は読むことより書くことのほうが難しいというのは、今回の結果にも表れている。漢字を一字ずつ見ていくと、読むほうではL3～L5レベルの漢字は60～70%の留学生ができていたが、書くほうではL5レベルは88%であるものの、L4レベルでも51%の留学生しか書けていないことがわかった。学年別で見ると、受講者は1年が一番多いが、学年が上がれば若干漢字力も高くなっている。ただ、顕著な差はない。また、漢字圏である中国の留学生は漢字においては得点が高くなってもよいはずであるが、中国の漢字を書いてしまうケースが多かった。中国の留学生でも漢字力の低い留学生は語彙の意味がわからず、漢字が書けなかった。語彙力を伸ばすことで漢字圏の留学生は漢字力も伸びる可能性が高い。漢字クラス履修者の入学時日本語プレースメントテストと期末テ

スト、及び、漢字実力テストと期末テストとの相関から、統計学的に漢字クラスの授業を通して、受講生全体の漢字力が底上げされている可能性が示唆されるという結果になった。そして、4学期の漢字クラスでの授業を通して筆者もいくつかの点が整理できた。1点目は自習、自律学習の重要性である。漢字実力テストで点数が取れなかった外モンゴルと韓国の留学生はノートに何度も漢字を書き、テストに備えていた。しかし、なかなか覚えられないと言い、点数も伸びなかった。中間、期末テストの前には出題する漢字を絞り、出題範囲として70問程度の語彙プリントを渡している。頻繁に小テストも行い、点数の悪かった学生には再テストを行うなど、繰り返すことを重視して授業を行っている。それにもかかわらず覚えられない。それらの学生に聞くと、授業外で漢字の勉強はほとんどしていないことがわかった。2点目は漢字力は聴解力、語彙力と深くかかわってくるということである。漢字力をつけるために特に筆者が重要だと思っている語彙力を伸ばす試みとして聞き書きを行っている。まず、まとまった文を聞き取り、語彙を推測し、それを漢字に置き換える練習を行う。聞き取りの段階では漢字圏、非漢字圏に関係なく、まず、音を理解する聴解力、語彙力が求められる。その後、語彙を漢字にする作業が来る。この練習では第一段階の聴解力でまず差が出る。漢字圏、非漢字圏に関わらず、音が拾えずにひらがなを書くこともままならない学生がいる。次に、拾った音から語彙の意味を理解する段階に入ると、意味がわからないまま音だけで知っている漢字を書く学生が出てくる。しかし、ここまでできる学生は正解を伝えると、とたんに表情が明るくなり、きれいに清書をして提出しようとする。このような練習から語彙力と漢字力との関係が改めて重要だとわかった。3点目は書ける漢字を少しずつ増やしていくということである。留学生には限られた漢字をまず正確に覚えるようにと言っている。その一環として中間、期末テストの前には出題範囲を示したプリントを2週間ほど前に渡している。もちろん、授業内で小テストも行うなどして覚えた漢字ばかりである。出題範囲の語彙数は実際にテストに出題する1.5～2倍の量にしている。それでも半分覚えれば50点は取れる可能性はある。漢字は覚えても書く機会が減り、日本人でも漢字が書けなくなったと言われる。そのような中で着実に覚えていくのには努力を要するだろう。せめて漢字に特化したクラスで楽しみながら漢字が学べたらと思う。今回の分析から漢字クラスを履修した留学生全体の漢字力が底上げされているという結果も出た。今後もより効果的な指導方法を探りながら指導に当たっていききたい。

引用・参考文献

- ウラムバヤル, ツェツェグドラム (2009) 「漢字学習ストラテジーに関する研究の現状と課題－非漢字圏日本語学習者にとっての効果的な学習ストラテジーとは－」『日本言語文化研究会論集2009年第5号』
- 学校法人 KCP 学園 KCP 地球市民日本語学校編「1日15分の漢字練習中級下」アルク
- 加納千恵子 (2018) 「筑波大学における日本語漢字教育の理念と実践－BASIC KANJIBOOK シリーズによる漢字の授業」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集=Journal of Japanese Language Teaching33, 1-20』
- 川森めぐみ (2000) 「漢字の筆順指導についての一考察」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター「日本語・日本文化」26巻』
- 國澤里美・梶原彩子 (2017) 『中級「漢字・語彙」クラスにおける自律学習の実践』『名古屋学院大学論集言語・文化篇第28巻第2号PP.135-151』

- 小林由子（2004）「日本語の漢字学習におけるメタ認知：漢字圏学習者を対象として」『北海道大学留学生センター紀要8:88-98』
- 瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸「ニュースの日本語聴解50」スリーエーネットワーク
- 濱田美和・高島智美（2009）「中国人学習者に対する漢字教育のための基礎研究－漢字の読み・書きクイズにおける誤答の分析－」『富山大学留学生センター紀要（8）1-12』
- 半田淳子（2011）「漢字指導の留意点－日本語教育の立場から－」『全国大学国語教育学会発表要旨集121, 21-24』
- Vorobeva Galina（2014）「非漢字系学習者の文字認知特性に適合した漢字教材の開発」『JSL漢字学習研究会誌第7号』
- <http://www.nihongo-pro.com/jp/>

漢字実力テストの問題

I. 漢字の読み問題

1. 学校法人「森友学園」との関係が国会で断定調で否定してきた稲田朋美防衛相が一転、裁判を通じた籠池泰典理事長との関係を認めた。稲田氏は「記憶違い」と釈明し、安倍晋三首相も擁護したが、野党は自衛隊を指揮する防衛相の「虚偽答弁」は許されないとして辞任を要求。政府答弁そのものの信用性が問われかねない事態になった。
2. 英国の欧州連合（EU）に対する離脱通知条件が整った。法の成立を待って、前例のない脱退手続きが月内にも始まる。ただ、交渉は難航が予想され、国民投票で過半数が離脱を指示した英国国民の間でも、不安が募っている。

II. 漢字の書き問題

1. でんわをしながら本を読むと、どちらかのないようが頭に入らないように、人間は同時に2つのことにしゅうちゅうできない。
2. シャープは2018年にも液晶テレビの国内せいさんからてったいするほうしんを明らかにした。「世界の亀山ブランド」として一時代をきざいたが、近年はさいさんがあつかしていた。
3. タワーマンションの建設ラッシュで住民がふえ つづける東京湾岸で、通勤こんごつや子育て支援施設の不足がしんこく化している。
4. 来日したサウジアラビアのサルマン国王一行に、ビジネスかくだいを目指す日本のけいざい界があつい視線を送っている。
5. 川崎市内はちゅうしょう きぎょうをサポートするため、市は東京TYフィナンシャルグループ、傘下の3ぎんこうと産業振興に関する包括連携きょうていをむすんだ。
6. 小田急箱根ホールディングス（小田原市）は、けっこん50周年の金婚式をむかえる夫婦1組に、7月15日発で1泊2日の箱根りょこうをプレゼントする。家族もたいしょうで、3世代で最大15人をしょうたいするという。

（朝日新聞より抜粋 2017年）